

Title	平井新名誉教授略歴・著作目録
Sub Title	平井新名誉教授略歴および著作目録 A chronology of Prof. Arata Hirai A bibliography of the writings of Prof. Arata Hirai
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1969
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.62, No.7 (1969. 7) ,p.765(103)- 766(104)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平井新教授退任記念特集号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19690701-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「国家は種々の産業と同じ数だけの職業連合にこの資本の使用を委任し、これらの連合は、各産業の労働者によって選ばれた技術委員会によって指導される^(注67)」ともいうが、こうした見解は、かれの産業の管理方式をよく示すものといえよう。この点では、たしかに、ジョレスの経済思想は分権化した集産主義思想であり、垂直的方向における組的経済フェデラリズムと、水平的方向における自治体的フェデラリズムの結合であった^(注68)。そして、これはまた、後のイギリス社会主義者たち、とくにシドニー・ウェブ (Webb, Sidney) の考えた協同民主国のイメージの先駆をなすものでもあった。

こうしたジョレスの社会像に関して、モローは、後年かれはその思想を発展させて国家と人間支配の廃止をとくクロボトキンのアナーキズムに近づいた^(注69)というが、それは首肯しがたい。モローは労働が最高のものとなり、搾取も抑圧もなく、すべての人々の努力が自由に調和され、社会所有が個人の発展の基礎になり、保証となること、および人が競争と闘争の状態から協力の状態へ、経済的受身の態度から主導性と責任への態勢へとうつることをもって、その証拠としている。しかし、これと同じようなことはすでに 1890 年代にのべられており、そのときすでにかれがアナーキズムは遠い将来の理想としてはよいが、空想的なものでしかないといっているのをみても、それが後年に至ってのジョレスの思想的発展の結果とはいいがたいのである。

以上要するに、ジョレスは集産主義をもって人間の自由と平等とを確立するための条件とし、共産主義社会を歴史の中での最も完全な、最も動的なものとしたのであった。そして、経済史家の立場から、また道徳的情熱家としての立場から、その到来を希求し予言したものであった。

注(67) La Dépêche; 20 nov. 1893.

(68) Auriol; Jaurès, p. 82.

(69) Auriol; Jaurès, p. 83.

平井新名誉教授略歴

明治 32 年 9 月	福岡市に生まれる。
大正 6 年 3 月	中学修猷館卒業。
大正 12 年 3 月	慶應義塾大学経済学部卒業。
大正 13 年 4 月	図書館司書に就任。
大正 14 年 4 月	高等部教員を兼任。
昭和 8 年 4 月	慶應義塾留学生として 1 年間ヨーロッパ各国に留学。
昭和 16 年 12 月	体育会日吉寄宿舎主任を兼務。
昭和 17 年 3 月	体育会蹴球部長を兼任。
昭和 17 年 8 月	体育会野球部長を兼任。
昭和 20 年 4 月	大学経済学部教授に就任。
昭和 20 年 8 月	日吉寄宿舎主任、野球部長を辞任。
昭和 22 年 4 月	早稲田大学法学部講師に就任、昭和 41 年 3 月まで在任。
昭和 24 年 4 月	都立大学人文学部講師に就任、昭和 27 年 3 月まで在任。
昭和 30 年 10 月	学生部長を兼任。「社会思想及び社会思想史の研究」によって義塾賞を与えられる。
昭和 31 年 12 月	経済学博士の学位を得る。
昭和 36 年 9 月	学生部長を辞任。
昭和 38 年 10 月	経済学部長、大学院経済学研究科委員長に就任。
昭和 40 年 9 月	経済学部長、大学院経済学研究科委員長を辞任。
昭和 43 年 4 月	防衛大学校講師に就任、現在に至る。
昭和 44 年 3 月	経済学部教授を退任。
昭和 44 年 4 月	名誉教授に就任、経済学部講師および大学院経済学研究科講師を兼任して現在に至る。

著作目録

著書・訳書

- ソヴェート連邦事情解説(慶應義塾大学講座経済学) 慶應出版社 昭和 12 年
- 全体主義に於ける国家と民族 慶應義塾高等部学術研究会 昭和 18 年
- 倫敦に於ける諸国民の祝祭(マルクス・エンゲルス全集 3 巻所収) 改造社 昭和 4 年
- 商業に関するフーリエの一断片(同 3 巻所収) 昭和 4 年
- 瑞西の内乱(同 3 巻所収) 昭和 4 年
- マルクス自伝手記(同 7 巻の 3 所収) 昭和 4 年
- ゲルン共産党訴訟事件の暴露(同 5 巻所収) 昭和 3 年
- 初学者のために 社会主義と共産主義(附コミンテルンとコミンフォルム) 慶應出版社 昭和 22 年
- 万人書房より昭和 23 年、社会思想研究会出版部より昭和 31 年
- 近代社会思想史 慶友社 昭和 23 年
- 共産主義の理論と批判 渡辺書房 昭和 25 年
- 社会思想概論 塙書房 昭和 25 年
- 社会思想(慶大通信教材) 昭和 26 年
- 社会思想史研究 塙書房 昭和 35 年
- 近代フランス社会主義の潮流 慶友社 昭和 35 年

三田学会雑誌, 経済学年報収録論文

- 「科学的社会主義は如何にして可能なりや」 三田学会雑誌 18 卷 7-8 号, 大正 13 年 7-8 月
 「マルクス社会学説の起源並に之に対するヘーゲル, フォイエルバッハ, シュタイン及びブルードンの影響」
 同 19 卷 3 号, 大正 14 年 3 月
 「『共産党宣言』剽竊問題」 同 19 卷 6 号, 大正 14 年 6 月
 「マルクス階級闘争説起源」 同 19 卷 11 号, 大正 14 年 11 月
 「『共産党宣言』前史の一酌, 亡命者同盟の史的考察」 同 20 卷 6 号, 大正 15 年 6 月
 「階級闘争説に於けるマルクスと其先駆者」 同 20 卷 8 号, 大正 15 年 8 月
 「瑞西時代のイルヘルム・ワイトリング, 『ワイトリング研究』の一節」 同 21 卷 3 号, 昭和 2 年 3 月
 「ブルノオ・ヒルデブランドの一書簡」 同 21 卷 6 号, 昭和 2 年 6 月
 「唯物史観批評」 同 21 卷 8 号, 昭和 2 年 8 月
 「マルクシズム前史, 正義者同盟の建設よりマルクス・エンゲルスの加盟まで」 同 22 卷 1 号, 昭和 3 年 1 月
 「コンシデラン『社会主義原理, 第 19 世紀民主主義宣言』の前編」 同 22 卷 4 号, 昭和 3 年 4 月
 「『バボエフ説分析』並にバボエフ及バボエフ主義文献小録」 同 22 卷 6 号, 昭和 3 年 6 月
 「『人類の現実と理想』に現はれたるワイトリングのユートピア」 同 22 卷 7 号, 昭和 3 年 7 月
 「バブウフの Conspiration pour l'Égalité」 同 24 卷 2 号, 昭和 5 年 3 月
 「バブウフ主義と秘密結社」 同 24 卷 6 号, 昭和 5 年 6 月
 「ブランキの階級闘争説とプロレタリア独裁説」 同 25 卷 2 号, 昭和 6 年 2 月
 「カベエの共産主義体系」 同 26 卷 12 号, 昭和 7 年 12 月
 「マブライの社会思想」 同 29 卷 3 号, 昭和 10 年 3 月
 「ルイ・ブランの社会主義体系」 同 29 卷 11 号, 昭和 10 年 11 月
 「ドマンジェー氏編註『バブーフ選集』に就いて」 同 30 卷 2 号, 昭和 11 年 2 月
 「ジャン・メリエとその『遺書』」 同 30 卷 4 号, 昭和 11 年 4 月
 「マルツイ著『共産主義の建設者コンスタンタン・ベクル』を読む」 同 30 卷 7 号, 昭和 11 年 7 月
 「モレリイ『自然法典』と其思想的背景」 同 31 卷 12 号, 昭和 12 年 12 月
 「マルクスの『人性論』」 同 39 卷 4 号, 昭和 21 年 10 月
 「マルクスの思想的系譜」 同 39 卷 6 号, 昭和 21 年 12 月
 「唯物史観に於ける『生産方法』・『生産力』の問題」 同 40 卷 4 号, 昭和 22 年 4 月
 「フランス革命と社会主義」 同 40 卷 7-9 号, 昭和 22 年 9 月
 「マルクスの階級論について——一つの覚書——」 同 42 卷 1 号, 昭和 24 年 1 月
 「アリストテレスの社会思想」 同 45 卷 4 号, 昭和 27 年 4 月
 「メシア思想の起源と発展」 同 45 卷 12 号, 昭和 27 年 12 月
 「社会思想としてのヘブライズム」 同 46 卷 10 号, 昭和 28 年 10 月
 「聖トーマスの財産論について」 同 47 卷 12 号, 昭和 29 年 12 月
 「バブーフの共産主義理論」 同 50 卷 10-11 号, 昭和 32 年 11 月
 「啓蒙期の社会主義と道徳哲学, 特にモレリイとマブライを中心として」 同 52 卷 7 号, 昭和 34 年 7 月
 「ブランキに関する断片」 同 54 卷 3 号, 昭和 36 年 3 月
 「若きマルクスとサン・シモニスム, マルクシズムとフランス社会主義との関係に関する研究の一節」
 同 55 卷 3 号, 昭和 37 年 3 月
 「形成期マルクスとその周辺 その一, 『プロレタリア』観」 同 59 卷 8 号, 昭和 41 年 8 月
 「社会思想学者としての小泉信三先生」 同 59 卷 11 号, 昭和 41 年 11 月
 「若きバブーフについて」 経済学年報 11, 昭和 43 年 3 月

(白井 厚作成)

Social Policies and Labour Force Policies in the Period
 of State Monopoly Capitalism, Centering Around
 the Legal Measures on Workers' Damage Aid
 and Retirement Allowance Reserve Savings

by Kanae Iida

The state monopoly capitalism is not essentially different from monopoly capitalism. Briefly stated, it sprang up in the early years of the twentieth century; its significance as control power was heightened through World War I and came to assume the most advanced form of monopoly capitalism in the panic of 1929. Thus the panic of 1929 can be said to have been the decisive moment in the sway of monopoly capitalism.

Any discussion in the past on the relationship between state and monopoly in state monopoly capitalism dealt only such phases as the accumulation of capital, the formation of monopoly financial capital and their relationship to state authorities. The approach of this sort, however, often resulted in a formalistic comprehension of the subject, and failed to see the manysided relationship between the formation of monopoly financial capital and the state authorities, naturally giving opportunity for labour—the counter factor against capital—to strengthen itself quantitatively and qualitatively, and to bring about an inevitable and close tie between labour and socialism.

With this relationship as a medium, labour spared no effort to substantiate and enlarge its force by calling out to the whole of the labour class.

As a concrete example for this movement, we recall the case of Russia. In the midst of the successful revolution and in the tentative peace enjoyed in the latter half of 1920's, the labour class and some intellectuals heightened their interest in and inclination toward socialism, as the vanguard not only in economic field but in the cause of socialist politics.

The ideological radicalism of the working class following the extreme impoverishment and the seriousness of a chronic unemployment compelled the controlling class to set up a large-scale system of policies to cope with labour. On the other hand, there came into being the nationalistic or Fascist movement to check such a political attempt, awakening the rightists to come forward in labour movement. More concretely expressed, there developed the economic policies that were definitely different from those adopted prior to the panic of 1929.

In other words, the economic policies then were the counter-measures against the panics caused by the inflation policy due to the controlled currency system and the increase in the expenses for various social policies and military purpose. They were the instruments, that is, they were the measures trying to take care of the cycle between prosperity and panic, the